前

入学試験問題

国語（理科）

（配点八〇点）

令和七年二月二十五日　九時三〇分～一一時一〇分

注意事項

一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
二、問題はすべて新課程と旧課程とに共通です。
三、この問題冊子は全部で十七ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
四、解答には、必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用しなさい。
五、解答用紙の指定欄に、受験番号（表面二箇所）、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
六、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
七、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
八、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白や裏面には、何も書いてはいけません。
九、この問題冊子の余白は、草稿用に使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
十、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
十一、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

◇M2(684—25)

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）

第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

草稿用

第二問

次の文章は『撰集抄』の一話である。これを読んで、後の設問に答えよ。

昔、御室戸の法印隆明といふ、やんごとなき智者、もろこしに渡り給はんとて、西の国におもむきて、播磨の明石といふ所になん住みていまそかりけるに、ア<u>あさましくやつれたる僧の、来たりて物を乞ふ侍り。さながら赤裸にて、ゑのこを脇に抱き侍り。人、後先に立ちて、笑ひなぶりける。あやしの者やと思して見給へば、清水寺の宝日上人にていまそかりける。イ<u>ひが目にや</u>とよく見給へど、さながらまがふべくもあらざりければ、かきくらさるる心地して、伏しまろびて、「あれはめづらかなるわざかな」とのたまはせければ、上人ほほゑみて、「まことに物に狂ひ侍るなり」とて、走り出で給ふめるを、人あまたして、取りとどめ奉らんとし侍りけれども、さばかり木暗き繁みが中に入り給ひぬれば、ウ<u>力なくやみ侍りけり</u>。

隆明法印は、あまりすべき方なく悲しく覚え給ひて、その事となく、その里にとまり居給ひて、広く尋ねいまそかりけれども、その後はまたも見えずなり給ひにき。さて里の者にくはしく事の有様を問ひ給へりければ、「いづくの者とも人に知られで、この村に住みても二十日ばかりなり」とぞ答へ侍りける。エ<u>この事、限りなくあはれに覚え侍り</u>。何と、げに世を捨つといふめれど、身のあるほどは、着物をば捨てずこそ侍るに、あはれにもかしこくも覚え侍るかな。

およそ、この上人はよろづ物狂はしき様をなんし給へりけるなり。ある時は、清水の滝の下に寄りて、合子といふ物に水を受けて、隠れ所をなん洗ひ給ふこと、常の態なり。いみじく静かに思ひ澄まし給ふ時も侍るめり。一方ならずぞ見え給ひし。澄み渡る心の内は、いつも同じさきらなれども、外の振る舞ひは百に変はりけるは、よしなき人の思ひを、我のみ一方にはとどめじと思しけるにや。

この上人ぞかし、中関白の御忌に、法興院に籠りて、暁方に千鳥の鳴くを聞き給ひて、

オ 明けぬなり賀茂の河原に千鳥鳴く今日もはかなく暮れんとぞする

と詠みて、『拾遺集』に入り給へり。明けぬるよりはかなく暮れぬべき事の、かねて思はれ給へりけるにこそ。かの『拾遺集』には円松法印と載りて侍るは、上人の事にこそ。

〔注〕 ○御室戸――現在の京都府宇治市にある三室戸寺。
○ゑのこ――子犬。
○合子――ふた付きの容器。
○さきら――才知。
○中関白――藤原道隆。
○法興院――藤原道隆の父、兼家が別邸を寺としたもの。
○『拾遺集』――三番目の勅撰和歌集。ただし実際には『後拾遺和歌集』に、ほぼ同じ歌が「円松（または円昭）法師」作として載る。

設問

(一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。

(二) 「この事、限りなくあはれに覚え侍り」(傍線部エ)とあるが、語り手はなぜそのように感じたのか、説明せよ。

(三) 傍線部オの歌は、どのようなことを表しているか、説明せよ。

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）

第三問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

人恒病執着。然亦不可概論。良繇学以好成、好之極名着。羿着射、遼着丸、連着琴与。夫着弈者、至屏帳垣牖皆森然黒白成勢、着書者、至山中木石尽黒、学画馬者、至馬現於牀榻間。夫然後以其芸鳴天下而声後世。何独於学道而疑之。

是故参禅人、至於茶不知茶、飯不知飯、行不知行、坐不知坐、発箧而忘扃、出厠而忘衣。念仏人、至於開目閉目、而観在前、摂心散心、而念恒一。良繇情極志専、功深力到、不覚不知、忽入三昧。亦猶鑽燧者、鑽之不已而発焔、煉鉄者、煉之不已

而成レ鋼ヲ也。

概シテ慮ニ其ノ着セントコトヲ而悠悠蕩蕩、如ニ水ノ浸レ石ヲ、窮ニ歴ストモ年劫ごふヲ、何ノ益カ之レ有ラン。

是ノ故ニ執滞之着ハ不レ可カラルレ有、執持之着ハ不レ可カラカルレ無。

（雲棲袾宏『竹窓二筆』による）

〔注〕

○羿着レ射、遼着レ丸、連着レ琴——羿は弓、遼はお手玉、連は琴の名人として知られる。

○森然——びっしりと。

○牀榻——ベッド。

○弈——囲碁。

○牖——まど。

○学道——ここでは仏道を学ぶこと。

○観在レ前——仏などを観想すること。

○三昧——深く集中した境地。

○鐩——火打石。

○慮——心配する。

○蕩蕩——ゆったりと気ままなさま。

○年劫——長い年月。

設問

(一) 傍線部a・b・dを平易な現代語に訳せ。

(二) 「何独於二学道一而疑レ之」(傍線部c)を、「之」の内容がわかるように、現代語に訳せ。

(三) 「執滞之着不レ可レ有、執持之着不レ可レ無」(傍線部e)とはどういうことか、本文の趣旨を踏まえて説明せよ。

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）